

二頭の馬に関する清正の選択

この 2 本の枝垂れ桜には、松本城の初期の頃の伝説がある。1594 年頃、城郭が完成したとき、城主の石川康長（1554-1643²）は、同じ大名の加藤清正（1562-1611）を迎えた。清正は江戸（現在の東京）からはるか南西の熊本の城に帰る途中だった。

清正の滞在が終わり、康長は清正に贈り物をしたいと考えた。彼は厩舎係の者に 2 頭の素晴らしい馬を連れてこさせ、清正に好きな馬を選んでくださいと言った。清正は、「あなたほどの目利きが選んだ馬をどうして私が選ぶことができますようや」と答え、清正は馬を 2 頭とも連れて帰ってしまった。

その後、この話を聞いた人たちは、清正の賢い選択に大いに感心したという。もし清正がどちらかの馬を選んでいたら、それは選ばれなかった馬が劣っていることになる。もし、劣っている馬を選べば、馬を見る目がないと揶揄される。清正は 2 頭を選ぶことで、この問題を巧みに回避し、馬の気持ちまで汲み取る繊細さを示したのである。

清正は旅立つ前に、新しい馬を現在の桜の木の前身の桜の木に繫いだと言われている。